会員の広場

「サヨナラ」ダケガ人生カ

上田 次兵衛（東京）

今年は春先から殺伐な事件が多かった。あまりに多くて暫く経つとその大部分は人々の記憶から消えてしまう。その中で6月に三十代の男が大阪吹田市の交番前で若い巡査を包丁で刺し、拳銃を奪って逃走するという事件があった。犯人（容疑者）は翌日、約八キロ離れた山中で見付かり逮捕され、刺された巡査の方は重傷だったが手術を受け快方に向かっているということでほっと一安心の事件だった。その後、週刊誌などで容疑者の家庭環境等に関する報道もあったが、私がこの事件に興味を覚えたのは、事件の一週間後に新聞で、容疑者の中学校卒業文集の作文を目にした時だった。四百字足らずの短い文章だが、要約すると次のような内容である。『中学校の三年間で自分は変わった。感銘を受けた言葉は「色即是空」。この世の中に不変なものはない。いつかは自分も死ぬが、後悔しない為に今を思い切り生きようと思う。』十五歳の少年にしては何と厭世的なと思いながら読むと、最後に二段下げて小さな字で「厄除け詩集」からの引用として「酒を勧む」の四行が記されていた。

「この盃を受けてくれ
どうぞナミナミ灌がせておくれ
花に嵐のたとえもあるぞ
「サヨナラ」だけが人生だ」

実はこの「勧酒」という詩は、中国の詩人于武陵の五言絶句を作家の井伏鱒二氏が日本語に訳したもので、一般にはカタカナ表記の次の訳詩の方が人口に膾炙している。

「コノサカズキヲ受ケテクレ
ドウゾナミナミツガシテオクレ
ハナニアラシノタトエモアルゾ
「サヨナラ」ダケガ人生ダ」

私が井伏氏のこの訳詩を知ったのは三十代に入った頃で、今でも時々口ずさむ位好きな詩歌の一つであるが、それをあの容疑者が十五歳の時点で知っていたとは驚きであった。なお、原詩の読み下し文は左のとおりである。

「君に勧む金屈巵　満酌辞するを須いず花発いて風雨多し　人生別離足る」

「花発いて風雨多し」を「花ニ嵐ノ例モアルゾ」と訳したのはさすが井伏さんと思う。しかし、最後の結句を『「サヨナラ」ダケガ人生ダ』と断定してしまったのは些か疑問に思う。「人生には別れがあまりに多い故、花爛漫の今こそ大いに飲もうではないか」というのが原詩の意味のような気がする。最後に八十の翁から一言、「十五歳の君の想いには共感する。潔く刑に服して立派に更生されんことを。」